No.5

東京文化資源会議

［ティーチャ］

T-Cha

ニューズレター

東京文化資源会議
Tokyo Cultural Heritage Alliance

キオクとキロクで まちの文化資源を継ぐ

「本郷のキオクの未来」

文京区・本郷はかつては下宿屋の流れを汲み、100軒以上もの旅館が軒を連ね、旅館のみならず銭湯や床屋、本屋等の賑わいのある「文化」が培われてきた地域でもあります。

しかし、現在の本郷には、そうした文化資源と呼べるものが次第に姿を消しつつあります。現役で営業している旅館は数軒のみで、本郷が旅館街だったことを知る人も少なくなってきました。

「2011年から、文京区に携わる建築家メンバーによる団体、文京建築会ユースの活動の一環で、区内の文化資源を調査したり発信したりする活動をしていました。当時は、歴史ある建物を記録し、活用提案していく活動だったのですが、まさかこの数年で数ある銭湯や旅館が減り続けていくとは思わず、地域に何ができるのかを考えていました」

そう話すのは、本郷のキオクの未

NEXT PAGE

来の座長で文京建築会ユースの栗生はるかさん。文京区の銭湯情報を集めた冊子制作や展覧会の開催等、建築家ならではの活動を行ってきました。2012年には区内に11軒あった銭湯も、おとめ湯、鶴の湯、月の湯等がたて続けに廃業。2015年には本郷菊坂のほとりにある菊水湯が廃業することに。

「頻繁に通っていた菊水湯がなくなることを聞き、日常的に使っていた利用者の使い方の記憶を残せないかと考え、栗生さんとともに菊水湯の記録保全活動に取り組み始めました」

文京建築会ユースメンバーの一人で、月の湯の保全活動にも携わっていた東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻の三文字昌也さん。菊水湯の記録では、地域企業である松下産業協力のもと建物内の様子を3Dスキャン撮影したり、プロのカメラマンにお願いしドローン撮影をしたりするなど、最新技術を導入した様々な手法を駆使して記録を行いました。

「菊水湯廃業の話を聞きつけ、地域の団体や大学等多くの人が集まってきました。銭湯を介して多様な人達がつながり、もっと地域に対して何かしなければという機運が高まってきたんです」(三文字さん)

菊坂から本郷へ まち全体の文化資源を継ぐ

建物のみならず地域全体の文化資源的価値を引き出し、地域の魅力を発信しつつ次世代にいかに残していくかも大きな課題です。

「建物は、地域と連動しているからこそ文化的な価値を生み出しています。点ではなく面として地域を捉え、多様な文化資源を継承していくためにできることは何か。同時に、本郷に住んでいる住民の方々に本郷に面白いものがあることを知ってもらいたいと考えるようになりました」(栗生さん)

2015年10月24日に「さようなら菊水湯見学会」の実施、菊水湯廃業をきっかけに、菊坂界隈の記録を複合的に進める「菊坂のキオク」実行委員会を立ち上げ、その後は「もりばあのいえ」で開催された「本郷のキオクの未来を考える昼／語る夜」や街歩き企画等、様々な活動を通して住民の生活と結びつく活動へと展開。

2017年3月から東京文化資源会議の支援も受け、菊坂のみならず本郷全体の文化資源の記録や保全活動へと拡張するために「本郷のキオクの未来」へと名称を変更。

時を同じく、2016年に明治37年創業の「朝陽館」が惜しまれながら閉館することに。そこで、文京建築会ユースが主体となり、本郷のキオクの未来も連動して2017年7月に文京シビックセンターにて「歓迎!本郷旅館街」展を開催。朝陽館の建築模型や当時の写真、VR技術等を使って旅館内を体験できるコンテンツを制作。旅館の保全や記録活動にも取り組み始めました。

「旅館や本屋等、様々な歴史的な資源が地域にはあります。これらを顕在化していきながら、もっと地域の人たちとつながりを作っていかなくてはいけません。メンバーには、ここ以外にも自身で地域の活動をしている人も多く、本郷のキオクの未来はそうした人たちをつなげるプラットフォームになりつつあります」(栗生さん)

旅館と地域との新しい関わり方

地域のつながりで出会ったのが「鳳明館」です。中でも鳳明館本館は、明治時代は下宿として、戦後は旅館として今なお昔の姿そのままに営業し、平成12年には登録有形文化財にも指定された和風建築の旅館です。活動の打ち合わせ場所や見学会の実施、「歓迎!本郷旅館街」展では朝陽館と合わせて現役の鳳明館の取材や展示を行う等、本郷の旅館街としての歴史を伝える連動した企画を行いました。

「これまでは団体客をメインとし、旅館の中だけで過ごすことを推し進めてきました。地元の商店街や店舗との付き合いも少なかったといえます。しかし、昨今の個人旅行の需要や地域におけるあり方を見直すなかで、本郷のキオクの未来や大学関係者らと近年関わりを持つようになり、一緒になって取り組むことが増えてきました」(鳳明館代表取締役社長の小池邦夫さん)

宿泊だけでなく、最近では昼間の活用としてイベントや展示、地域の会合等にも積極的に鳳明館の広間を貸し出しています。デイユースを促進し、これまでご縁のなかった企業や団体とも連動しながら新たな旅館の業態に挑戦しています。

「本郷といえば東大。そのネームバリューをもとに、もっと街に人が回遊する企画を打っていく。そこに、旅館や銭湯といった街の文化的な施設やコンテンツを活かすことができるはず。商店街や街全体が一帯となって取り組むことで人通りを変えていく。時代とともに、地元で商売を営んでいる人たち自身も変わっていかなければ」(小池さん)

Masaya Sammonji × Kunio koike × Haruka kuryu

まちとともに生きる まちとともに住まう

こうした小池さんのお考えもあり、本郷のキオクの未来としても様々な形でご一緒することに。本プロジェクトは、廃業や解体にあわせて記録するのではなく、現役で営業されている旅館や喫茶店、書店等のお店を応援しながら、本郷という街を発信することに今後は注力していく予定です。

「記録を撮ったり施設にお伺いしたりするなかで、関係性が少しずつできてきました。鳳明館のように、我々を受け入れてくれる人たちもいます。地域の歴史をあぶり出し、地域の文化を一帯となって発信し伝えていく。住民だけでなく、東大の学生等外からの目線が地域の価値を発見し掘り下げていくこともできるはず。大学、地域、企業、地域の商店が密接に結びつく仕掛けを今後も展開していきたいです」(三文字さん)

本郷には、未だ現役で営業している老舗の旅館や喫茶店、書店等まちが誇る文化資源が残っています。こうした地域の方々との関係性を丁寧に編んでいくこと。地域の価値を顕在化させ、地域住民と共有し、地域の人たちの「自分たち事」を目指していくこと。本郷のキオクの未来は、これから生まれる地域のキオクを築き上げていっています。

(記事構成：江口 晋太朗　撮影：鈴木渉)

T-Cha NOW TOKYO PROJECT

**東京文化資源会議では、民産官学の様々な分野の専門家や実践者が集い、
東京の各地域で育まれている様々な文化資源をハード面・ソフト面から活用するプロジェクトを推進しています。
ここでは、東京文化資源会議全体の動向や各プロジェクトの近況をお知らせします。**

アキバプロジェクトが「広域秋葉原作戦会議」として本格始動

前号にて紹介した「アキバプロジェクト」が、正式名称「広域秋葉原作戦会議」プロジェクトとして本格始動。8月10日から9月1日まで行われていた神田明神資料館・特別展「起源探訪のインターレスト～シュタインズ・ゲートと秋葉原の歴史展～」の展示協力を行ないました。

人気テレビアニメ「シュタインズ・ゲート」に関連した資料や情報を、作品の舞台になった秋葉原にある神田明神資料館にて展示するというこの企画。広域秋葉原作戦会議は、江戸から今日に至るまでの秋葉原の街や秋葉原に関連した事象の歴史について解説パネルを作成しました。8月12日に開催されたトークイベントにも、プロジェクトメンバー複数名が登壇し「シュタインズ・ゲート」と秋葉原にまつわる解説やトークを行い、SNS等で大きな反響を得ました。

9月6日にはプロジェクト初となるシンポジウム「シンポジウムグレーターアキバ：情報・知識の交差路」も開催。「オタクの街」として国内外に知られている秋葉原を、周囲の街も含めた「グレーターアキバ」として広域で捉え直すという問題意識と目的、メンバーらによる秋葉原の江戸から明治期、現在への変遷と都市の可能性について報告。後半のラウンドテーブルでは「グレーターアキバと自分との関係」「グレーターアキバの未来に期待すること」「グレーターアキバのエリア特性や変わらない遺伝子」についてそれぞれの論者が自身の見解を述べた後、秋葉原はライブエンターテインメントの街になるべきかどうか、現在の秋葉原を肯定的に捉えるべきか、グレーターアキバの情報と知識の交差路的性質を今後どのように伸ばすべきか等について熱い議論が行われました。

地域における デジタルアーカイブ生成の仕組みづくり

地域の中でのデジタルアーカイブ構築のための拠点づくりを目指す「地域文化資源デジタルアーカイブ」プロジェクトのなかで進行しているのが「DA-Lab (Digital Archive Laboratory)」計画。地域のコミュニティ資料、自治体関連資料等をデジタル形式でアーカイブ化し、住民が共有することによって、地域コミュニティの活性化に役立てるというプロジェクト自体の目的を、具体的な場作りにおいて具現化する取り組みです。

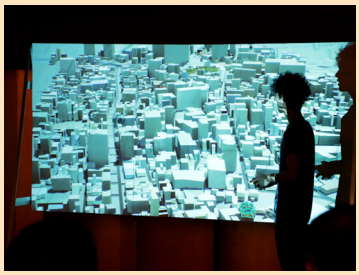
とりわけ今年度は「デジタル・コレクション・イベント」の実施に向けて活動しています。このイベントは、地域の住民等を対象に、地域の資料の収集、デジタル化、公開、活用までの一連の作業を、参加者自身に行ってもらうものです。それにともない、7月にプロジェクトメンバーが試験的に個人の資料を持ち寄り、デジタルアーカイブ化した情報について語り合うプレワークショップを行いました。

学術・宗教を横断した自由な議論に向け「社寺会堂塾」開講

「湯島神田社寺会堂」プロジェクトでは、これから2年間にわたり「社寺会堂塾」を開講いたします。学術・宗教施設を横断した自由な議論をめざし、地域の歴史や生活文化から宗教の地域性や普遍性について考え、理解を深めることを目的とする活動です。

初回は、湯島聖堂・斯文会館にて7月4日に開催。東京大学教授・小島毅氏による「元号」をテーマにした、江戸儒学と一世一元制についての講演の後、参加者同士による活発な意見交換がなされました。当日の様子は新聞にも掲載された他（中外日報・7月6日付）、今後もフォーラムや出版物等を通じて発信する予定です。

今期5回目の検討会は、湯島天満宮にて開催されました。当検討会メンバーの建築家・国広ジョージ氏より、旧岩崎邸とその周辺について、時代背景と共にユーモアを交えた講演をしていただきました。また、東京理科大学・宇野求研究室によって制作された湯島・神田駿河台地域の地形模型を披露。CGを投影しながら、個々の文化資源の生かし方等について報告していただきました。現在は、作成した模型の一般公開のための準備を進めています。



トークイベント「神田小川町からスポーツをひらく」を開催しました

「スポーツ文化資源」プロジェクトでは、体を動かすスポーツ自体の実践だけでなく、様々な議論を重ねる定例会を月1回実施しています。この定例会での議論をさらに深めるべく、8月18日にはトークイベント「神田小川町からスポーツをひらく」を開催。スポーツ店が立ち並ぶ神田小川町の人々やスポーツに関心のある方を交えながら「今ここ（神田小川町）でするスポーツとは何か、今までにない開かれたスポーツとは何か」を議論しました。都市生活史の視点から森田暁氏、社会学の見地から新雅史氏のそれぞれのゲスト講演の後は、参加者を巻き込んでのディスカッションに展開し、会場内は活発な議論で溢れました。

10月末には神田小川町にてスポーツを実践、11月には本年第二回目のトークイベントの開催を目指しています。

歴史文化資源を保存するための提言作成

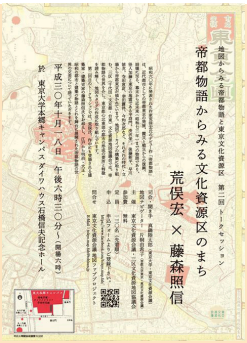
「リノベーションまちづくり研究会」では、東京文化資源区を首都東京の「歴史文化ゾーン」として位置づけ、世界に発信していこうと、歴史街区としての谷中地区の保全や、神保町古書店街の更新等をケーススタディとして取り上げ、制度提案に向けて資金や担い手等の課題を整理してきました。

「谷根千まちづくりファンド」による古民家再生第1号「八代目傳左衛門めし屋」が7月に開業し、注目される一方で、喫緊の課題として谷中地区の都市計画道路の見直しが計画されており、台東区では地区計画策定の準備をしているものの、谷中の歴史的環境を守るのには十分ではないということで、今年度中の提言をまとめるために議論を進めています。

T-Cha
NOW TOKYO PROJECT

荒俣宏氏×藤森照信氏「帝都物語からみる文化資源区のまち」を開催

「地図ファブ」プロジェクトでは、地図からみる「帝都物語」と東京文化資源区第2回トークセッション「『帝都物語』からみる文化資源区のまち」(主催：東京文化資源会議・三区文化資源地図協議会)を10月18日(木)18時30分より、作者である荒俣宏氏と建築家・藤森照信氏を迎えて東京大学本郷キャンパスダイワハウス石橋信夫記念ホールにて開催します。江戸から明治・大正・昭和の都市と建築の物語とこれを舞台に展開された帝都物語の世界の交差について語っていただきます。実は、藤森氏は帝都物語の作中にも「藤盛照信」として登場しているほどの縁。荒俣氏との軽妙で奥深いトークが楽しみです。



「東京ビエンナーレ2020構想展」にて東京文化資源会議のブース出展

9月22日(土)から10月14日(日)まで、アーツ千代田3331メインギャラリーにて開催中の「WHY TOKYO BIENNALE? 東京ビエンナーレ2020構想展」に、東京文化資源会議も出展しています。同展示は、1952年から東京・上野で開催された「日本国際美術展(東京ビエンナーレ)」で、1970年の〈人間と物質〉をテーマに掲げた第10回目で幕を下ろした東京ビエンナーレを経て、2020年から始まるこれからの時代の「東京ビエンナーレ」実現に向けて動き出すための取り組みです。

9月29日には同展示中のイベントとして開催された「東京文化資源区の観点から『東京ビエンナーレ』を考える」には栗生はるか氏他、地域で活動を行っている東京文化資源会議メンバーが「東京文化資源区」の観点から「東京ビエンナーレ」が「地域に何を生み出すのか」を語りました。

東京文化資源会議の第一回総会が開催されました

7月2日、東京文化資源会議2018年度第一回総会が、アーツ千代田3331にて開催されました。総会では、2017年度活動報告、2017年度収支報告及び監査報告、2018年度事業計画案及び予算案を発表を行いました。質疑応答、総会後の懇親会では、活発な議論や意見交換などが行われました。東京文化資源会議の活動は、昨年以上の幅を見せており、活動しているプロジェクトの数も10を超え、領域も分野も超えた専門家が集いながら、ご協賛いただいた企業とも連携しながら、様々な活動が生まれる場となっています。

本年度は、昨年度から取り組んでいる本ニューズレターの定期発行やウェブサイトの更新等、今後ますます広がる東京文化資源会議の活動を社会的認知を高めるための情報発信や、賛助会員、個人会員の方々との意見交換を行う秋の報告会の開催いたします。その他、組織整備や関連機関との連携強化、賛助会員との個別事業の取り組み等を行いながら、皆様とともに東京の未来に向けて歩んでまいりたいと考えています。

編集後記

いよいよ2020年のオリンピックも2年後に控える中、東京における様々な催しを通して、東京の歴史、東京の文化を身近に感じる機会も多くなりました。東京文化資源会議では、後世に向けた新たなプロジェクトがたくさん生まれています。ぜひ、東京という都市の未来を一緒に考えていくメンバーとして活発な活動や意見交換をしましょう!。(江)

東京文化資源会議には多くのプロジェクトチーム(PT)があり、それぞれが精力的に活動していて、会議に関わる活動の全体像を把握するのは大変なことです。ニューズレターT-Chaを編集している広報委員会は、PT相互の情報交換を行う場でもあります。ネットワーク的な活動のHubとなる広報委員会から、東京文化資源会議の活動の広がりと深さを皆様へお届けします。(陸)

T-Chaを創刊して1年が経ちました。明文化すること・伝えることの大切さをあらためて知ることができました。当会議に関わっていただけている皆様へ、これからも「へぇ!」と思えるきっかけや、アイディアのヒントを提供できたらと思っています。(雅)

T-Cha

［ティーチャ］東京文化資源会議ニューズレター　No.5
渋み、旨み、味わいのある東京の文化資源的エキスを3ヶ月に一度、お届けします。

編集：東京文化資源会議広報委員会　デザイン：渋井史生(PANKEY inc.)　執筆：江口晋太朗(TOKYObeta Ltd.)、野口雅乃
写真：鈴木渉　印刷・製本：スターツ出版株式会社　発行人：東京文化資源会議　発行日：2018年9月30日
〒101-0054　東京都千代田区神田錦町2-1　TEL：03-5244-5450　FAX：03-5244-5452　MAIL：info@tohbun.jp　URL：http://tohbun.jp/

T-Cha